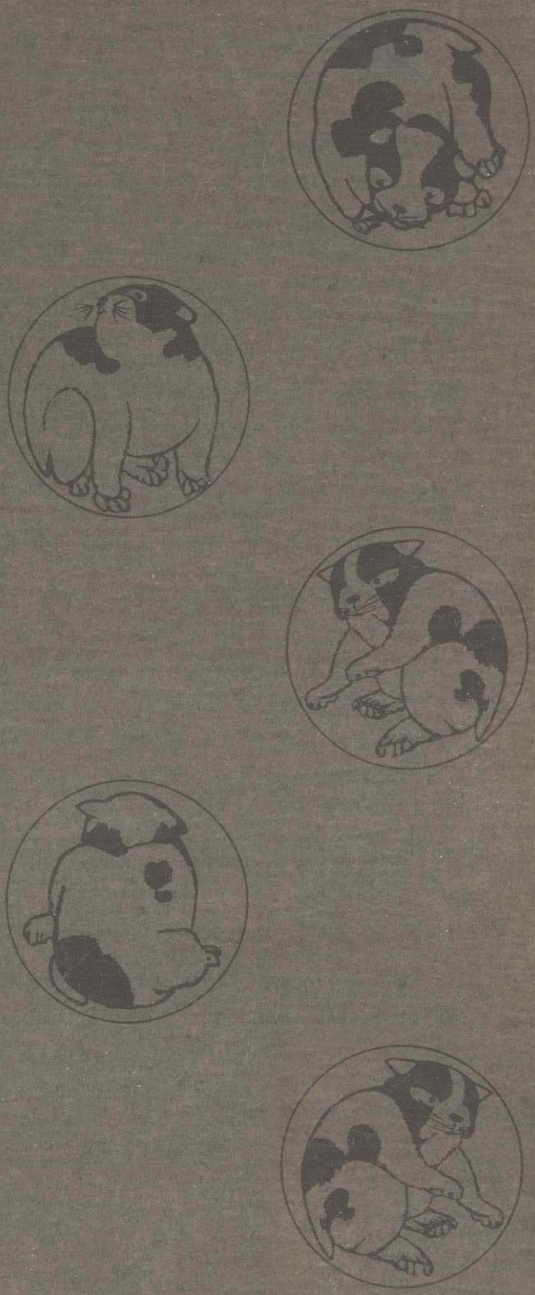

南総里見八犬伝

七

曲亭馬琴作
小池藤五郎校訂

岩波書店

南総里見八犬伝

七

曲亭馬琴作
小池藤五郎校訂

岩波書店

南総里見八犬伝 (七) (全一〇冊)
一九八五年五月一五日 第一刷発行©

定価二六〇〇円

校訂者 小池藤五郎
発行者 緑川亨
発行所 〒101 東京都千代田区一ツ橋二-五-五
株式会社 岩波書店
電話 〇三(二六五)四一一一
振替 東京六-二六四〇

印刷・精興社 製本・文勇堂

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan
ISBN 4-00-004317-x

解説

うぐひすの初音に眠る座頭かな

馬琴が九歳の折の俳句である。十歳で松平信成に仕え、戸田忠諏・水谷信濃守、更に小笠原家・有馬家と渡り歩いていた。後に医師山本宗洪の門に入り、亀田鵬斎の僕となり、石川雅望に学んで狂歌師を志し、また、橘千蔭に書を習うなど、流浪生活が青年馬琴の姿であった。

師竹庵吾山に俳諧を学び、十五歳で俳文「弔鶯辞」を作った。次兄興春が歿した際、長兄羅文のものした一文などは、彼ら兄弟の文学趣味を語るものである。天明七年の「俳諧古文庫」(二冊)は、馬琴が兄弟や師友の俳句を集めたもの、「罔両談」は吾山の三年忌に手向けた俳諧の雑説で、羅文の序があり、馬琴二十三歳の著である。

寛政二年、二十四歳の馬琴は、当時第一の戯作者山東京伝を訪れて入門を願った。京伝は持論の戯作者師匠不用論を彼に説いた。しかし『廿日余つかいはたして四十両尽用而二分狂言』(三冊、黄表紙。歌川豊国画)は京伝に見てもらった作品で、寛政三年の春に「京伝門人、大栄山人」と署名して出版した。これが彼の処女作である。

将来文壇に竜騰すべき俊才にも進路に模索があった。戯作者も香しくなく、神奈川宿に売卜に

出掛けたが旨く行かず、悄然として江戸に帰った。その時、筆禍で手錠に処せられた京伝を訪れたことが、馬琴をして文壇に雄飛せしむる契機となり、馬琴は先ず京伝の創作のお手伝をした。

やがて日本橋通油町の地本問屋蔦屋重三郎の店員になり、佐吉と改めた。寛政五年の春、曲亭馬琴の名で黄表紙を出版した。曲亭は、中国の山の名、『漢書』の「巴陵曲亭の陽に楽しむ」に取ったもの。馬琴は、小野篁の「才馬卿に非ずして琴を弾くとも能はじ」(『十訓抄』)に拠ったものである。

寛政五年(二十七歳)九段中坂下、飯田町二丁目の下駄屋会田氏の寡婦百の入婿になり、伊勢屋清右衛門と名乗った。寛政八年読本の初作『高尾船字文』(寛政七年刊、長喜画)を刊行し、文壇の王座への歩みは急速になった。文政七年に飯田町の家と清右衛門の名を長女の夫の吉田新六に譲り、伜宗伯の家——神田同朋町に移住した。宗伯は長年の間、病弱の身を忍んで父の作品を校閲して来た。特に『八犬伝』の第九輯巻之十一、第百十二回が脱稿したのは天保六年五月一日であって、労咳と喘息の持病で重体の宗伯は、父の止めるも聞かず原稿を校閲した。馬琴の原稿は、いつも宗伯の朱筆を加えた上で筆工に渡されるのであった。これが父の創作へ助力することの最後となり、五月八日に宗伯が歿したことは誠に痛ましい。友人渡辺崋山は入棺した宗伯の死顔を写生した。

天保七年四谷信濃坂に移住し、生活の不如意と寂寥とが身に纏わったが、馬琴は屈しなかった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

嘉永元年十月十三日の朝から胸痛と喘息が起り、草間宗仙に見せた。十一月五日に中島玄伯の診察を受けた後、元気で遺言をし、六日の午前四時大往生を遂げた。年八十二。墓所は小石川茗荷谷深光寺。家紋は八本矢車、圏中に竿三竿。法名著作堂隠誉簑笠居士。昭和三年贈従四位。

（昭和十四年九月）

凡例

一、校訂には『南総里見八犬伝』の初版本を用い、校正は毎回原本に拠って厳重に行った。

一、読みやすくするために、左の諸点に特色を持たせたほかは、全く原本通りにして置いた。

(1) 本文に段落を設け、詞には鉤(「)を施し、仮名の濁点・半濁点は適宜に補った。

(2) 冒頭の漢文の序の繫符(—)を除き、目録は仮名交りに改めて本文中の回号に一致させた。

(3) 本文中に和歌・詩文・その他が挿まれている場合には、それを抜出して別行とした。

(4) 原本の文章はすべて句点(。)で切ってあるが、それを読点(、)・句点(。)に分けて用いた。名詞を重ねた場合で、原文に句点がない時だけ、並列点(・)を附けて置いた。

(5) 原本中の文字・仮名づかいの甚だしい誤謬——例えば「城平等」を「城兵等」に、「聡察叡智」の「そうさつはいち」を「そうさつえいち」に訂正——は訂正して置いた。

(6) 原本の仮名づかいは「亡父」・「滅亡」、「亀篠」・「亀篠」等の如くに、同一の文字についてもしばしば不統一である。かかる点は、むしろ時代の仮名づかいと、作者自身の特徴とを知る上から、原本通りにした。ただし「人物一覧」には多く用いられている方を振って置いた。

（7）馬琴の特色ある文字使用法を保存するために、極力原本通りの漢字を用いた。ただし「也」・「歟」その他を仮名書にした。「漁夫」の如き場合には左側の片仮名のみを削った。

〔編集付記〕

旧岩波文庫版『南総里見八犬伝』全十巻（小池藤五郎校訂、昭和十二～十六年刊）を改版するにあたって左の改変をくわえた。

一、旧岩波文庫版を底本とし、国立国会図書館蔵の初版本『南総里見八犬伝』（架蔵番号別三―一〇六―二）と対校して誤植などを訂した。

一、右国会図書館本により、旧岩波文庫版で省かれていた挿絵を余すところなく補った。

一、漢字は新字体を用いたが、仮名づかいは初版本どおりとした。

一、底本で使われている異体字のうち、逃・羣・薯・胷など、いくつかを通行の漢字（逃・群・腰・胸）に改めた。

一、読みやすさの便をはかって振り仮名の一部を省略したが、人名・地名などの固有名詞はこの限りではない。

一、底本の（　）は原本の割注を示しているが、今回これを〔　〕に改めた。原本の欄外注は［　］に収めた。

一、各輯の総目録は訓み下し文に改めたが、本文中の回号との異同は初版本のままとした。

（岩波文庫編集部）

話の筋（第七巻の分）

〔第九輯〕（巻之十三之十四より巻之二十三まで）

茶店の老婆はかつて孝嗣の乳母であった政木狐で、箙大刀自に化けて孝嗣を救ったのである。武術を試みるための喧嘩――親兵衛は直ちに和解し、老婆から妙椿退治の方法を教えられた。一千人を救った功徳で、老婆は不忍池に入り狐竜となって昇天した。

親兵衛は孝嗣を伴って上総へ渡ろうとし、両国の船宿へ行く。越後を出て膏薬売に身を窶した石亀屋次団太主従が、土地の破落漢に喧嘩を売られているのを端なくも救い、宿に連れて帰った。宿で隣室の襖が開いて、思いもよらぬ蜑崎照文が現れた。親兵衛は照文から里見侯の御教書を渡され、素藤謀叛の顚末を聞き、急ぎ支度を整え、孝嗣・次団太および館山落城以来この辺に潜伏していた田税逸時・苫屋景能らを引き連れて、快速船で館山に乗り込んだ。親兵衛は政木狐の教の通り、城の搦手にある脱穴から攻め込み、素藤を捕え、妙椿を退治して館山城を占領した。親兵衛は、後事を荒川清澄に託し、政木大全と改名した孝嗣や、次団太らと結城をさして発足した。

これより先、〻大法師は嘉吉の戦で討死した里見季基以下の忠魂を弔うため、古戦場に草庵を結んで常念仏を修したが、文明十五年四月十六日の結願に当り、里見の代香使照文を始めとして、

信乃・現八らの七犬士も参列して大法会を行った。結城家の菩提所逸疋寺の悪僧徳用は嫉視し、結城家の長城・堅名らの小人を語らい、兵を率いて草庵を襲った。これを知った犬士らは、先ず丶大・照文に季基の遺骨を持って立退かせ、寄せ手を打ち破りながら退いた。丶大・照文らは利根川の支流左右川で長城惣利の隊に襲われ、照文・代四郎(与四郎)は捕えられ、丶大の命も危くなった。時に、親兵衛一行が来あわせ、丶大・照文らは虎口を遁れた。八犬士はここではじめて揃い、廃寺に宿った。結城の城内では敗兵から事件を聞き、重臣小山朝重を八犬士の宿る廃寺に遣わして、陳謝した。それとともに、嘉吉以来の里見・結城両家の隔絶も解け、旧交を復するに至った。

先君の遺骨を奉じて丶大・照文が安房へ帰ったので、義実父子は白浜に一寺を建立し、盛んな法会を行い、丶大を院主にした。前からの縁故で、犬士らは武蔵国穂北の氷垣家に落ち着いた。丶大・照文の迎えで、八犬士は安房国へ乗り込み、滝田城で義実に稲村城で義成に謁して君臣の誼を結んだ。里見侯は、八犬士が揃って里見家へ参ったのは丶大の功であるとし、また亡父の金碗孝吉が創業の大功を表彰する意味で、八犬士に金碗の姓を賜わることとしたが、それには勅許を願う必要があるので、親兵衛を正使、照文を副使とし、多くの貢物を齎らして海路を京都に上らせた。

親兵衛らの船は三河国苛子崎で海賊の襲撃を受けたが、親兵衛は代四郎の水練と伏姫神の冥助

とで、海竜王脩羅五郎を討ち取り、照文は今純友査勘太を生捕り、辛うじて危難を脱した。

文明十五年秋八月頃浪速に着いた親兵衛一行は、代四郎を遣わして京都の情況を探った後に上京し、管領細河政元の手を経て夥しい貢物を献じ、勅許を願った。詮議の上、金碗氏を許すという宣旨は滞りなく下がった。親兵衛は朝恩を拝謝し、帰国の暇を賜わろうとしたが、政元は何故か帰国を許さず、親兵衛を自邸に抑留した。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

主要人物一覧（第七巻の分）

○信乃・荘介・現八・道節・小文吾・毛野・大角・親兵衛　八犬士。

里見義実　義成　義成は義実の嫡男で当主。義実は滝田城に住み、義成は稲村城を居城とした。

蜑崎十一郎照文（輝文）　蜑崎十郎輝武の子。八犬士を捜索するために諸国を遍歴し、犬士を召致した点で、大法師と共に大功があった。

荻野上風　萩野下露　石亀屋次団太および弟子の鯽三の仮名。次団太は不貞の妻嗚呼善を殺して越後を立退き、膏薬売となり、犬江親兵衛の推輓で里見家に仕えた。

向水五十三太　枝独鈷素手吉　両国辺の無頼の顔役。親兵衛に懲らされたのが縁で、館山城攻撃に功を立てた。

鮑八　石亀屋次団太の弟子。嗚呼善と通じ、千千三暖で鯽三に殺された。

政木大全　扇谷定正の臣河鯉佐太郎孝嗣の改名。里見の家臣になり上総国大田木城主となる。

直塚紀二六　蜑崎照文の若党。後に照文の娘の山鳩の婿となって蜑崎の家を継いだ。

小山大夫次郎朝重　結城の城主小山成朝の重臣。能化院に、大法師および八犬士を訪い、徳用らの罪を詫びた。

朝暮七　下総国結城の在の狙公。里見季基に大蛇の危難を救われ、名刀「狙公」を奉った。

十十八（浄西）　里見季基の馬の口取。季基戦歿の後、出家して浄西と号し、主君の冥福を祈った。

影西　浄西の子。父に孝養を尽し、父の歿後京都で修行。後に逸足寺（逸匹寺）の住職。

未得　逸足寺の先住。徳用の悪行を諫めたが聞かれず、後に影西を後住に推薦した。

徳用　逸足寺の住職。、大法師の草庵を襲い、犬士らに生捕られ追放の刑に処せられた。

禄釈坊堅削　逸足寺の侍者。徳用の悪行に味方して、犬士らに捕えられ徳用と共に追放された。

長城惴利（逸利）　堅名経稜　根生野素頼　小山成朝の兵頭。徳用に味方し、大法師の草庵を襲うが、犬士に破られた。惴利は百姓剛九郎に殺され、経稜・素頼は捕えられ後に病死。

剛九郎　結城在の村長。酔っての口論から、結城の臣長城惴利を斬って自殺した。

隣尾判官伊近　三河国渥美の郡領。蓍山で海賊査勘太を討ち、蜑崎照文の危難を救った。

錦織機馬　田作岩四郎　共に隣尾判官伊近の兵頭。

海竜王脩羅五郎　海賊の巨魁。追捕を遁れて東海に来り、三・遠・駿の港を荒した。三河の苛子崎で里見の船を襲い、犬江親兵衛と水中で組打をなし、姥雪代四郎に討たれた。

今純友査勘太　海竜王の同類。三河国の蓍山で照文を襲い、捕えられて斬られた。

水冤鬼柄杓九郎　灘渡破船二　海竜王の手下。船商人に化けて里見の船を襲い、親兵衛に殺された。

鋸鮫五鬼五郎　査勘太の手下。隣尾家の役人設良四九二郎綾丑と偽り照文らをおびき出した。

足利義政　足利義尚　前将軍と現将軍。義尚は義政の子。義政は京都東山に住み東山殿と呼ばれた。

細河政元　管領。親兵衛の才幹を愛し、家臣にしようとして安房国に帰ることを許さず、抑留した。

香西復六時長　細河政元の家臣。徳用の父。政元を戸倉鴞四郎に弑させ嵐山の城に拠って戦死。

目　次

解　説
凡例・編集付記
話の筋（第七巻の分）
主要人物一覧（第七巻の分）

南総里見八犬伝（七）

南総里見八犬伝第九輯下帙之上附言
南総里見八犬伝　第九輯下套上総目録　九集第三版

第九輯巻之十三之十四

第百十六回　賢士重て犬士を知る　政木肇て政木を詳にす　……一七

第百十七回　恩に答て化竜升天を示す　津を問て犬童風濤に悩む　……三七

第九輯巻之十五

第百十八回　両国河原に南客北人に逢ふ　千千三畷に師弟奸婬を屠る　……三三

第百十九回　来路を説て次団太驥尾に附く　余談を尽して親兵衛扁舟を促す　……三九

第九輯巻之十六

第百二十回　命令を伝て使臣征伐を正くす　一葉を献して窮士前愆を償ふ　……四七

第百二十一回　天資神祐石門牢戸を劈く　犬江親兵衛魔を破り賊を夷ぐ　……一二三

第九輯巻之十七

第百二十二回　勲功を譲りて親兵衛法会に赴く　賞禄を後にして安房侯寒郷を温す　……一三五

第百二十三回　小乗楼に一僕故主に謁す、大庵に十僧法筵を資く……一五五

第九輯巻之十八

第百二十四回　師命を守りて星額遺骨を齎す、残捨を受て癩僧禍鬼を告ぐ……一八〇

第百二十五回　逸疋寺に徳用二三士と謀る、退職院未得名詮諫て不レ得……二〇四

八犬伝第九輯下帙中巻第十九簡端贅言

南総里見八犬伝　第九輯下套中総目録　九集第四版

第九輯巻之十九

第百二十六回　仮捕使三路に兵を行る、義兄弟両林に悪を懲す……二三九

第百二十七回　大庵の厄に親兵衛伴を喪ふ、石菩薩の前に信乃応報を悟る……二四四

第九輯巻之二十

第百二十八回　犬士露宿して追隊を迎ふ　老僧袱を褰て冥罰を示す……二七一

第百二十九回　忠僕死に事る霊仏の起本　孝子京を去る伝燈の法脈……二九二

第九輯巻之二十一

第百三十回　里見侯白浜に旅櫬を葬る　大法師穂北に客情を果す……三一五

第百三十一回　八行の霊玉光を良主に増す　九歳の神童氏を花営に請ふ……三四一

第九輯巻之二十二

第百三十二回　金碗後無して更に後あり　姥雪望を失て反て望を遂ぐ……三六九

第百三十三回　客船を哄して水寃鬼酒を沽る　波底に没みて海竜王仁を刺んとす……三九〇

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.